

## 大隈重信と津田梅子の接点に関する考察

—— 周辺の人々と大隈の支援に着目して ——

ママトクロヴァ ニルファル

### はじめに

本論文は、女子英学塾（現津田塾大学）の創設や発展を背景として大隈重信と津田梅子の接点について、周辺の人々の役割や大隈の支援に着目して考察するものである。

大隈重信（一八三八―一九二二）は、政治家として、また東京専門学校の創設者として著名だが、女性教育の推進や女性の地位向上に果たした役割も大きい。その一例を示すと、日本女子大学（現日本女子大学）の創立委員長を務めただけでなく、東洋女学校（現東洋女子高等学校）や明治女学校の創設にも協力している。また、女性教育の普及と女性の地位向上について多くのメッセージを送って女性の意識改革を促し、女性教育に対する世間の理解を得ようとした。さらに、矢島樽子をはじめ、広岡浅子、吉岡弥生など、多くの女性運動家や教育者を応援した。津田梅子も大隈

の応援を仰いだ一人であった。

一方の津田梅子（一八六四～一九二九）は、周知のように一九〇〇年に女子英学塾を創設し、女性の高等教育の分野を開拓した。その後、女子英学塾は一九〇四年に専門学校として認可され、以来多くの有為な女性を社会に輩出し続けた。津田の活動の幅は広く、日本の英語教育にも多大な貢献をしたことが注目に値する。また、女性の地位向上を目的とした社会事業にも積極的に参加している。

大隈と津田は、教育事業や社会事業を通して日本の近代化を推進したことに共通点があり、明治の激動の時代を共に生きた関係にもある。その中で、互いに接し、何らかの影響を与えていたことは十分に考えられるだろう。とりわけ、大隈は政治家として多くの教育者や運動家を応援した。また、大隈は多くの女子教育機関を訪問し、演説などをして女子生徒や創立者を励ましていることも確認できる。

津田梅子は、大隈の支援によって多くのことを手に入れることができた。具体的には、アメリカの婦人クラブ連合会と接点を持つことができた。また、イギリスの大学を見学、聴講することができた。大隈を通して政財界にアクセスすることもできた。さらには、大隈の支援を受けていた人々が津田の事業を手助けし、女子英学塾で活動したことも間接的に大隈の後援者としての役割を物語るものであった。

本論文は、大隈と津田の接点に焦点を当て、どのような場面で会っていたのか、大隈は津田をどのように支援したのかを検討し、二人の関係を明らかにしようとすると同時に、その意義についても考察する。次いで、大隈と津田は共通の知人を介してどのような結びつきがあったのか、女子英学塾では大隈の支援を背景としてどのような教育事業や出版事業が行われたのか考察し、その社会的ネットワークの効果を明確にしたい。

先行研究においては、津田梅子の伝記を中心に大隈の支援について部分的に記述されているものが多いが、大隈と

津田の接点に焦点を当てた研究は管見の限りでは存在しない。本論文では、写真や書簡など新資料を用いて様々な事実から大隈と津田の関係性を明らかにしていく。大隈と津田の関係性を明らかにすることは、大隈が日本の女性教育や女性の地位向上にどのような役割を果たしたか明確にするとともに、大隈の支援が津田にとってどのような意義を持つか解明することにもなる。

### 一 岩倉使節団と北海道開拓使

ここでは、六歳の津田梅子が海外に留学した背景として北海道開拓使と岩倉使節団を中心に考察し、その中で大隈重信の役割や津田との接点について検討したい。

後に記す女子英学塾第九回卒業式における大隈の演説から明らかのように、大隈と津田の出会いには津田が六歳の時にアメリカ留学に出発した日から始まる。一八七一年一月二日、岩倉使節団は五〇余名の留学生を伴ってアメリカに出発した。その中に、津田梅子ら五人の女子留学生も含まれていた。岩倉具視を全権大使とするこの使節団に大隈は参加していないが、使節団派遣を提案したのが大隈であった<sup>②</sup>。海外に使節団を派遣することは、大隈の師匠のフルベッキ (G. H. F. Verbeek) の発案であり、大隈はフルベッキから受け取った意見書を岩倉に提出している。下記の演説から明らかになるように、大隈は岩倉使節団を見送る際には、津田梅子ら女子留学生と会っていたのである。

アメリカへ女子留学生を派遣する提案は、黒田清隆によるものであった。北海道開拓使は一八六九年七月に設けられ、黒田は一八七〇年五月より開拓使次官に任命されていた。黒田は、一八七一年一月に、開拓事業調査のため、欧米を視察するが、欧米の女性教育の進歩に驚き、また当時ニューヨークで少弁務使として駐在していた森有礼と会っ

て女性教育について議論し、女子留学生を派遣するに至ったのである。

黒田はアメリカの農務局長ケプロンを顧問に招き、ケプロンを伴って日本に帰国する。一八七一年九月九日に、ケプロンの来日を歓迎する宴が開かれているが、これが津田梅子の留学につながる。ケプロンの歓迎会に、津田梅子の父・津田仙が招待されている。津田仙は後述するように、農学者でアメリカにも渡航歴があり、一八七一年一月に、開拓使の囑託になっていた。この歓迎会には参議であった大隈も出席している。歓迎会の模様について、「農業のみか、我邦の女子教育にも一大刷新を施すべきを通論し、大隈参議も双手を挙げ必要を述べたに相違ない」と記されているように、農業や女性教育が話題になっており、女性教育を推進することに大隈も賛同したものと考えられている。この歓迎会は、津田仙が娘をアメリカ留学に応募させるきっかけにもなったのである。

黒田が大隈に宛てた一八七一年一〇月四日付の次の書簡でも女子留学生について言及している。<sup>①</sup>

啓而者過日伺出候女生徒外国へ差出方云々はしきりに昨日も相待申候得共未た為何御無沙汰も不被為在、就ては御模様一寸伺上度、万一差支等出来候は、偏に御尽力奉伏冀候

このように、偶然も重なり、女性教育に関心が高い人々の後押しもあって、津田梅子ら五人の女性が初めて海外留学を果たすことができた。

津田梅子は、アメリカで初等教育・中等教育を受け、一八八二年一月に、一年にわたる留学から帰国した。しかし、開拓史が一八八二年二月に廃止されており、新しい所管先の文部省は受け入れの準備をまったくしていなかった。津田梅子ら元女子留学生の活躍の場は極めて限られていた。ちなみに、一八八二年は、大隈が一八八一年一〇月に下野し、翌年の一〇月に東京専門学校を創設した年でもある。

## 二、津田梅子の渡米・渡欧と大隈の支援

その後の大隈と津田の活動を概略すると、津田は、帰国三年後の一八八五年に伊藤博文の推薦で華族女学校（現学習院女子大学）に教授補として就任し、ようやく活動の場が見つかる。他方大隈は、しばらく政権を離れた後、一八八八年二月に井上馨に代わって第一次伊藤内閣の外務卿となる。また津田は一八八九年九月には、在官のままアメリカのプリンマー大学への留学を果たすが、その時、大隈は黒田内閣の外務大臣であった。津田は、一八九二年にアメリカから帰国した後も、華族女学校で教鞭をとりながら、一八九八年五月からは女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）教授も兼任している。大隈は一八八九年一〇月に爆弾による襲撃を受けて外務大臣を辞任しているが、一八九六年九月に第二次松方内閣の外務大臣として再入閣している。

一八九八年五月に、アメリカのコロラド州デンバー市で開かれる万国婦人連合会大会に日本の女性代表を派遣する話を持ち上がる。第一次大隈内閣が成立する約一ヶ月前のことであった。大隈外相は伊藤首相と相談し、その結果代表として津田梅子と、同じく華族女学校教員の渡辺筆子が選ばれる。津田はさらに、アメリカ滞在後は、大隈の応援もあって一月からイギリスも訪問している。次に、それらの経緯について述べる。

日本を訪れていた、アメリカの婦人クラブ連合会副会長（副会長）ブリード夫人（A. I. Breed）が大隈を訪問し、一八九八年六月末にデンバー市で開かれる予定の同連合会第四回大会に日本女性の参加を要請した。大隈はこの話を喜び、伊藤と文部大臣外山正一に相談した結果、津田梅子と渡辺筆子の二人を派遣することに決まった。津田と渡辺は六月三日にアメリカに出発しているが、渡辺の日記によると、その前日に外山文部大臣と大隈邸に挨拶に行っている。渡辺は

「伯爵には御夫人御緒共にかくと後の事迄も御心添へありけり」と記し、綾子夫人が帰国後のことまで配慮したことを書き残している。<sup>6)</sup>三日の朝には、挨拶のため伊藤邸にも立ち寄っている。

アメリカでは、津田と渡辺は予定通り大会に参加し、三、〇〇〇人の聴衆の前で、英語で立派なスピーチを述べて日本代表の役割を果たした。津田は、スピーチの中で、この大会に出席することができたのは、大隈伯とその夫人の理解と援助があったからだと述べている。<sup>7)</sup>また、綾子夫人が当婦人クラブ連合会の名誉会員になったことにも触れている。

大会終了後は、津田と渡辺は女性教育の視察をするため、アメリカの各地を訪れている。津田は、多くの知人と再会し、一八歳のヘレンケラーにも面会している。渡辺筆子は福祉施設の視察も行い、後に滝乃川学園の第二代学園長に就任して福祉事業に尽力している。

続いて、一八九八年七月からは津田と渡辺のイギリス訪問の話が生まれる。これは、当時の東京の英国キリスト教会監督オードリー夫人 (B. W. Audry) が考えた企画であった。オードリー夫人に、津田と渡辺をイギリスに招き、本国を紹介すると同時に、二人のような女性が日本にもいることを本国に伝えたい狙いがあった。オードリー夫人は、その話を当時の駐日イギリス公使アーネスト・サトウ (E. M. Saitow) に持ち込み、サトウ公使は大隈に相談する。そして、オードリー夫人はイギリスにいる友人らに頼み、駐英公使加藤高明を介して招待状を出すことになる。招待状には、著名なイギリスの女性一人が名を連ねていた。

この一連のやり取りは、外務省記録に詳しく残されている。<sup>8)</sup>この時、大隈は首相と外務大臣を兼任していた。この案件について、大隈とアメリカ、イギリス駐在公使、在日イギリス公使など複数の関係者が連絡を取り合っている。その中で、大隈が津田と渡辺の渡英を全力で支持していることがわかる。とりわけ、渡航費に関して、誰が負担するかについて在米中川臨時代理公使から大隈に問い合わせがあり、次に示す電信 (図1) で大隈は「政府は負担しないが、私

大隈の英文の電信。「米国婦人倶楽部連合会大会開設二付津田梅子外一名参列之件（附英国ノ応招之件）」（外務省外交史料館所蔵）より抜粋。

電送第七八二號 1910

Makagawa  
Washington

67. In reference to your telegram 88, no limit is placed to the term of leave of the ladies, and they are to visit England solely on their own account. Consequently, the Govt will not defray their expenses; but I will myself remit 2,000 yen towards their travelling expenses, and also probably, that the Emperor will contribute 1,000 yen towards the same out of <sup>His Majesty's</sup> private funds. Above sums of money will be sent to London to the care of 在英公使.

Ohuma

Oct. 7 '98.

図1 在米臨時代理公使中川宛て

電送第八三一號 1910

Hayashi  
Berlin

在英公使 119. In reference to my telegram 110, two thousand yen contributed by me personally towards travelling expenses of 小島島 and 津田梅子 were sent by telegraph to you. You will hand the amount to the two ladies on their arrival in London.

Ohuma

Oct. 27 '98.

図2 在英公使加藤高明宛て

自身が旅費として二、〇〇〇円を送金する」と返信している。また、「皇后も一、〇〇〇円ほど出していただけるだろう」と添えている。さらに、英国公使宛の電信（図2）でも「小島島と津田の旅費として私が個人的に寄付した二、〇〇〇円を電報で送る」と伝えている。津田梅子の伝記では、「そのお金は多分宮内省の機密費であろう」と記述されているが、実際は大隈が個人で出したものであった。

滞在費は受け入れ側の女性たちも一部を負担している。また、津田仙がサトウ駐日公使を訪問し、娘のイギリス訪問やその旅費などについて相談をしている。それから、津田は華族女学校を翌年の九月まで休職することになるが、それも大隈が宮内省と交渉したと推察されている<sup>(13)</sup>。多くの人の協力があって津田梅子のイギリスの旅が可能になったのである。津田は、一月五日にイギリスに向かってニューヨークを出発した。なお、渡辺筆子は病気を理由に辞退している。

津田は、イギリスに半年ほど滞在し、数多くの教育機関を視察した。短期間ではあるが、ケンブリッジ・トレニング・カレッジやチェルトナム・カレッジ、セント・ヒルダス・カレッジの講義を聴講している。オックスフォード大学では一学期の間滞在して文学・倫理・歴史などの講義を聴講している。ミス・ヒューズ (M<sup>s</sup>. Hughes) やミス・ビール (Dorothea Beale) など、多くのイギリス人女性教育者と会って、教育問題について語り合った。後に女子英学塾で教鞭をとった安井てつとも会っている。また、ヨークの大主教やナイチンゲールのような人々と面会する機会に恵まれ、大いに励まされている。

津田の渡米・渡欧の旅は、女子英学塾を創設する約一年前のことであった。アメリカでは、女子英学塾を金銭的に支えたメアリ・モリス (Mrs. Morris Mary) や後に同校で長く教鞭をとったアナ・ハーツホン (A. C. Hartshome)、創設時に来日し初期の女子英学塾を助けたアリス・ベーコン (Alice Bacon) と会っており、私塾を創設するために協力を要請している。その他に、後に協力者となった新渡戸夫妻や河井道、プリンマー大学学長のケアリ・トマス (M. C. Thomas) にも会っている。イギリスでは、多くの教育機関を視察し、講義を聴講して、学校創りの参考にするとともに女性の高等教育の必要性を再認識している。この一年にわたる旅は、津田の学校を創設する夢が具体化するきっかけとなったのである。



それを支援した大隈は、海外の事情に精通しており、津田梅子ら日本の代表的な女性教育者が、欧米の女性教育や女性問題にかかわる経験をするに価値を見出していたのだろう。津田梅子らのこの経験の効果を見込んでの判断ではなかったかと推察する。

### 三、女子英学塾創設と大隈の演説

津田梅子は、一九〇〇年七月に華族女学校、女子高等師範学校を辞職し、女子英学塾を創設した。大隈は、ちょうど日本女子大学校の創立にかかわっている時期である。津田は、政財界の援助を一切受けずに自らの理想の学校を創設したかったため、その援助者には大隈や渋沢栄一のような政財界の人々は含まれていない。しかし、津田の協力者の中には巖本善治（一八六三～一九四二）や桜井彦一郎（一八七二～一九二九）など大隈の支援を受けていた人々がいる。それについては後に詳述し、ここでは大隈の女子英学塾で行った演説に絞って考察する。

大隈は、女子英学塾の節目でもある、第一回卒業式、さらに第九回卒業式兼創立十周年記念式に同校を訪れ、演説をしている。

一九〇三年四月二日の第一回卒業式では、「教育ある現代女子の覚悟について」の題名で講演をしている。<sup>(14)</sup> 津田は、この初めての卒業式について、アメリカの養母のアダライン・ランマン (Adeline Lanman) に報告し、「尊敬する政治家の一人、大隈伯に演説を依頼した」と書き送っている。<sup>(15)</sup>

次の一九一一年三月二八日の第九回卒業式兼創立十周年記念式には、渋沢栄一も同伴し、二人で祝賀講演を行っている。やや長いが、大隈の演説の内容の一部を掲載する。<sup>(16)</sup>

今日は津田さんが経営してお出でになる此塾が、十年間に竹の子の皮を剥くやうに、めきめきと大きく成長したとの報告を受けて私は実に喜ぶに堪えぬ。皆さんもさぞ、お嬉しい事だろうと思ふ。種々の辛苦を経て成り立たされた学校は将来発達すると信じる。私は津田先生には四十年前先生が七八つの時お目にかかった。津田先生、大山夫人、瓜生夫人、此お三方が日本の御婦人として日本と云ふ島以外に踏み出して、日本の将来に尽さうとされた。当時は昔のお大名たちが、陛下に大成をお返し申した其年末のことだ、小さい讓さん等が、たつた三人所謂万里の波濤を踏み越えて、男子に負けず、出かけられた。アメリカへ。英語の国アングロサクソンの精神が含まれてる言葉の国だ。アングロサクソン精神と大和魂とは似たようなものだ。諸君、英語を学ぶ人が忘れてはならぬところだ。維新以来の改革は重に英語から導かれた。欧州の文明を日本に採用して政治なり、法律なりに適用するやうになつた。日本の精神とアングロサクソンのとが結びついて今日の日本の文明が出来たのだ。だから私は皆さんの英語を学ぶと云ふ事が気に入つた。最早世界は英語の世界だ、アメリカ一億萬人の人口を加へて計算すると世界の三分の一は英語圏だ、世界的になる日本には英語は非常に必要だ。昔は女は人格を持たなかつた、否、持たせなかつた。全体、国は男と女とで組織するものだ。男は横系で女は縦系のようなものだ、片一方なくては織物にならない。そこで始めて家と云ふものが有意義になる。

このように、大隈は女子英学塾の一〇年間の成長を喜び、将来の発展への期待も寄せている。また、津田との出会いにも触れ、「男子に負けず」海外へ留学したことを称えている。そして、アングロ・サクソン精神、英語圏の日本への影響、英語が世界的な言語であることなどを述べている。また、国や「家」は男女で組織するものだとして女性の役割も強調している。

以上のように、大隈は、二度ほど同校を訪れ祝賀演説を行っているが、一度目は高等教育を受けた女性の役割を強調し、二度目は津田との出会いや英語教育の重要性について語っている。大隈のような影響力がある政治家が演説を

行うことは、女子生徒に大きなインパクトを与えたのであろう。とりわけ、卒業生は社会に出る一歩前のことであり、自らの役目や責任を自覚する機会にもなったと考える。

なお、大隈は、たびたび女学校や女子専門学校を訪れ、卒業式などで演説をしている。日本女子大学校は頻繁に訪問していたが、その他にも女子英学塾、東京女医学校（現東京女子医科大学）、女子美術学校（現女子美術大学）、女子学院、三輪田高等女学校（現三輪田学園）などで演説をして女子生徒を励まし、創立者を応援した。一九一一年三月だけでなく、女子英学塾の他に、雙葉高等女学校（現雙葉学園）、女子学院の卒業式でも演説をしている。<sup>(17)</sup>

#### 四．キリスト教女子青年会発会式

日本におけるキリスト教女子青年会（YWCA）は、一九〇五年一〇月に設立され、初期の中央委員会委員に津田梅子や、女子英学塾で教鞭をとっていた河井道が含まれており、その設立にかかわっている。翌月には、東京YWCAが設置され、津田梅子が会長に選ばれる。一九〇五年一月二五日には、発会式が行われているが、会場として大隈は自邸を提供する形でこの組織の成立を応援した。ここではその詳細について述べる。

東京YWCAの発会式が大隈邸で行われたことについて、当時日本にYWCAを組織するために派遣されていた、キャロライン・マクドナルド（Caroline Macdonald）の伝記に次のように述べられている。<sup>(18)</sup>

菊の花が咲き乱れる大隈重信の大邸宅の庭に、招待客とYWCAの設立に関与した多くの人々が集まった。日本の政治家の大長老、前総理大臣、早稲田大学の創設者である大隈は自由主義者で、キリスト教に寛容であった。キャロライン、津田梅、河井道が大隈に助力を求めたとき、彼はこの園遊会の主人役を務めることを喜んで引き受け、彼自身が客を迎えることにも賛成

した。残念ながら病気のために彼はその役目を果たせず、祝辞を送るだけになったので、津田梅が八百人を越える客を迎えた。

以上の記述から津田梅子らがYWCAの設立に対して大隈に援助を求めた時、大隈は快く引き受けている様子や大隈自身は病気で欠席したこと、発会式は八〇〇人以上の参加者が集まったことなどがわかる。朝日新聞は、当日の式次第を次のように報じた。<sup>(19)</sup>

東京基督教女子青年会 本日午後一時、大隈伯爵邸内に於て発会式を挙ぐ次第左の如し

一 祈祷 △開会の辞、津田梅子 △挨拶、矢島揖子 △同、ミス・マクトナルド

△基督教女子青年会に就て、元田作之進 △演説 弁士 伯爵大隈重信、江原素六、成瀬仁蔵、フィッシャー

以上の流れで発会式が行われているが、津田は下記の「開会の辞」で、日露戦争後の日本の進歩に触れ、女子学生を保護するなど、キリスト教女子青年会の役割を次のように強調している。

世界の列強の中に加はつた今日、我国民の半数を占むる婦人は最もその地位を高め、ますます各方面に向つて進歩する様にならなければならない時節となりまして（中略〓引用者）

教育にますます普及し、ますます進歩するに連れて、女子の学生は盛んに都会に集つて参る此時節に女学生を保護し、慰め行くこの会の事業は、実に目下の急務でございます（後略〓引用者）。

一方、病気で欠席した大隈は、次のようなメッセージを送った。<sup>(20)</sup>

今日斯う云ふ結構な御催しを以て此庭園に斯く御集り下さいましたのに、不幸にして二三日以前から病気に罹り、唯今も矢張り床に居る有様であります。甚だ遺憾でありますが、今日此処で皆さんに御目に懸ることが出来ませぬ。併し此回が組織になりまして、また公の集まりでもあり或は演説会でもある場合に機会を得たならば、皆さんに御目に懸つて御話し申す所がありません。(桜井氏代述)

このように、大隈は欠席したことをお詫びし、組織を結成したことで次回以降の集会などへの出席を切望している。大隈は、キリスト教者ではなかったが、長崎で師事していたフルベッキからキリスト教の知識を得ており、キリスト教の倫理面を重視していたことから、キリスト教団体の支援も行っていたと考えられる。特にキリスト教女子青年会の場合は、女性の支援や保護がその目的であったため、大隈はその必要性を十分に理解していたのだろう。

なお、女子英学塾キリスト教女子青年会は一九〇七年二月に発足し、同校の生徒や卒業生に就職や社会事業に参加する機会をもたらした。

## 五. 大隈と津田の交流

大隈と津田の個人間の交流を証明するものとして、早稲田大学歴史館所蔵の二枚の写真と、早稲田大学図書館所蔵の津田が大隈に宛てた二通の書簡が存在する。

以下の写真は、大隈邸で撮影されていることがわかるが、これは、アメリカ婦人クラブ連合会の代表者ブラットナー夫人 (Mrs. Blatner) が来訪した日であった。『読売新聞』一九二二年一月三日朝刊<sup>(2)</sup>によると、この日は「日米両

国、旗の交換」が行われ、綾子夫人に日本女性の代表者としてアメリカの国旗が贈呈された。この儀式は、「国の大喪中の為め」非公式に挙行されたが、ブラットナー夫人は、「全会員八十万人を代表して国旗を贈呈」すると述べている。綾子夫人は既述のように、同連合会の名誉会員であった。また、津田梅子は一八九八年六月の同連合会の大会に参加したことも既述の通りである。

ブラットナー夫人は、この日の演説の中で、香港で開かれた婦人クラブ連合会大会について報告し、「綾子夫人を代表して出席した安孫子夫人」の尽力を称えた。安孫子夫人とは津田梅子の妹・余奈子のことで、一九〇九年に安孫子久太郎と結婚し、渡米していた。余奈子は一九一二年に香港女子青年会の設立に奔走しており、婦人クラブ連合会の大会にも出席したことが明らかになる。

また、ブラットナー夫人は、「一般の日本婦人も旧慣のまゝ、長く家庭にのみ捉はれず、家庭に尽くすと同様、社会にも力を尽くすべき」と述べ、日本人女性の社会における役割が変化すべきことを強調した。式典が終わった後、「広庭で記念写真」が撮影されているが、それが以下に掲載するものである。写真には当日贈られたブーケも写っている。



1912年11月2日、大隈邸。左の写真、一列目左端から津田梅子、新渡戸まり子、ブラットナー令嬢、大隈重信、ブラットナー夫人、綾子夫人、ケネディ夫人、大隈光子、宮岡夫人、岡田夫人。

二列目左から執行弘道、大隈信常、新渡戸稲造、塩沢昌貞、桜井彦一郎、宮岡恒次郎、岡田和一郎。後列がジョン・ラッセル・ケネディ。

会う機会が幾度かあった大隈と津田だが、管見の限りでは、残されている写真はこれのみである。以下の一九二二年二月二日付の大隈宛ての書簡で、津田は、米国からの「ブラックナー夫人」<sup>(2)</sup>一行の来客の際に自身も呼ばれたことや後日写真を贈られたことに対して次のように感謝の言葉を述べている。<sup>(3)</sup>

陳者先般米國ブラックナー夫人御招待に際し私迄も御招きを頂き末席に例するのは榮を蒙り御懇篤なる御饗応に預り候段、千万忝く感謝此事に奉存候。早速拝趨御御礼可申上存居候処、病氣の爲め外出仕兼ね心外に御無沙汰申上居候。然る処昨日は又結好なる御写真真御惠贈に預り、雖有永く当日の好記念と仕候。重ね―御懇情の思召身に余る光榮と深く奉感謝候。

大隈と津田個人の交流の他に、早稲田大学と女子英学塾の交流があった。一九〇六年一月九日、女子英学塾の各教員および生徒数名が、観菊

轉送時を宜は極評  
 新有海慶堂より  
 奉存此御写真  
 栄不ぶるナリ夫人  
 御招待に際し私迄  
 招きと頂き末席に例  
 するの榮を蒙り御懇  
 篤なる御饗応に預り  
 候段、千万忝く感謝  
 此事に奉存候。早速  
 拝趨御御礼可申上  
 存居候処、病氣の爲  
 め外出仕兼ね心外に  
 御無沙汰申上居候。  
 然る処昨日は又結  
 好なる御写真真御  
 惠贈に預り、雖有永  
 く当日の好記念と  
 仕候。重ね―御懇  
 情の思召身に余る  
 光榮と深く奉感謝  
 候。

以宜志此御贈時  
 雖有永く方日の好記念  
 と此御写真は極評  
 の思召身に余る光榮  
 の御感御礼に  
 近自來上居候は  
 礼の御感御礼に  
 承り、免礼と存居候  
 敬申上居候。御  
 禮申上居候。御  
 存居。 了之御音  
 書言 津田梅子  
 伯尊大隈重信殿  
 田舎夫人

のため大隈邸を訪れている<sup>23</sup>。また、早稲田大学関係者が女子英学塾で講演をしていることも確認できる。その例を示すと、一九二四年三月二八日、第一二回卒業式に浮田和民が「新時代に処する婦人の覚悟」について、一九二六年二月一日、安部磯雄が「社会の要求と個人の発達」について、一九二六年三月二九日、第一四回卒業式で高田早苗、一九一九年三月二九日に、朝河貫一、六月二五日に、佐藤巧一、一九一五年四月一三日および、一九二〇年一月四日には、中桐確太郎が講演をしている。中桐確太郎は一九一五年より女子英学塾の幹事、その後は理事も務めている。さらに、大隈講堂の設計に当たった早稲田大学教授の佐藤巧一は、女子英学塾の小平校舎（後のハーツホンホール）の設計も担当している。

## 六. 津田梅子の周辺の人々と大隈の役割

津田梅子は女子英学塾を創設するまでに、広い人脈を作っており、私塾創設時にその人々の協力を得ている。創設時の協力者を見ると、巖本善治、桜井彦一郎、上野英三郎など、津田梅子の父・仙と関係をもつ人々が多い。女子英学塾創立後も桜井は同校の講師や幹事を務め、巖本は課外講義を担当した。さらに二人は、一九〇四年の社団法人設立の際には社員に名を連ねている。一方、巖本と桜井は、大隈の応援も仰ぎながら、後述の大隈の著書『開国五十年史』の出版に尽力している。また、津田仙と大隈の交流も確認できる。ここでは、これらの人々の人物像や結びつきなどを確認し、後援者としての大隈の役割を明確にしたい。

津田仙（一八三七〜一九〇八）は、下総国佐倉藩の堀田氏の家臣小島良親（善右衛門）の四男として生まれる。一八五七年に江戸に出て、手塚律蔵の私塾又新堂で蘭学と英語を学び、一八六一年には外国奉行通弁役として採用される。



一八六七年、津田仙は、福沢諭吉らとともに幕府のアメリカ派遣団に通訳として随行して半年ほど滞在し、この間農業や女性教育に関心を持つようになる。そして先述したように、一八七一年に北海道開拓使の囑託になっていた。上述のケプロンの歓迎会に民間人から仙のみ招かれているが、仙は、麻布本町で農園を持っており、農業の知識も、英語力も備わっていた。

津田仙は、一八七三年五月に、大隈が事務局総裁を務めたウィーン万国博覧会に書記官として随行している。これは明治政府が公式に参加した初めての博覧会であった。大隈は政府の同意が得られず出国できなかったため、副総裁の佐野常民が現地に赴いている。仙は、ウィーンでホイブレンク (Daniel Hooibrenk) から農業の指導を受け、帰国後はその内容をまとめた『農業三事』(稿本)と上申書「農業三事を奉る書」を大隈に提出している。<sup>(25)</sup>『農業三事』は上下二巻、一八七四年五月に東京と大阪で刊行された。

津田仙は、一八七六年には、学農社農学校を創立している。学農社農学校は、一八八四年に閉校を余儀なくされ、八年しか存続しなかったが、慶応義塾と並ぶ四大私立学校のひとつであった。<sup>(26)</sup>同校は、巖本善治や田中宏、豊永真里、三田義正など、多くの有能な人材を輩出している。

この他にも、津田仙は農業雑誌の出版や、多くのキリスト教系学校の設立にかかわっており、新島襄、中村正直とともに「キリスト教界の参傑」と謳われた。

津田仙は、大隈とは年齢も近く、旧幕臣でもあり、早くから洋学を学んでいること、新しいことに挑戦する資質をもっていること、ボランティア精神をもっていること、など共通点が多かった。大隈は、政府の中心人物として大々的に活動しているが、仙はキリスト教の精神に基づいて啓蒙活動を続けており、この点に相違点があった。

早稲田大学図書館に一九〇五年一〇月二二日付の、津田仙が大隈に送った書簡が現存する。仙が、息子の四郎が出

向していた上海を訪れた際に、大隈に宛てた手紙で、上海が「東洋第一之貿易場」であることを報告している。仙はその二年半後の一九〇八年四月二十四日に亡くなっている。大隈との付き合いは、先述の北海道開拓使の時期から始まったとしても長く続いたことが窺える。また、仙の娘や弟子たちが大隈の支援を受けていたことも仙の存在感を物語るものと言えよう。

次に、津田仙、梅子父子と密接な関係にあった巖本善治、桜井彦一郎と大隈の関係について述べる。

巖本は、津田仙の学農社農学校の生徒であった。一八八四年に卒業した後も農学校にとどまって、『農業雑誌』の編集に携わるなど、仙の後継者となった。一八八五年からは、日本で最初の婦人雑誌『女学雑誌』を創刊し、翌年から編集人になっている。一八八七年からは明治女学校の教頭になり、一八九二年からは同校の校長に就任している。

桜井は、愛媛県松山市生まれで、上京して神田の東京英学校で学んだ後、明治学院に入学し、一八九二年に同校を卒業している。卒業後は、松山女学校で英語を教えていたが、やがて上京する。巖本善治経営の『日本宗教』の編集を担当し、一八九七年より明治女学校でも教えるようになる。

明治女学校は、大隈重信や渋沢栄一の財政的な援助を受けて創立された学校であった。同校は、木村熊二、鏡子夫妻によって創設されたが、木村鏡子の急逝に伴い巖本が経営するようになる。大隈が同校とかかわるようになった背景には島田三郎の仲介があつた。島田は明治女学校で講師をしており、大隈は、島田の案内で同校の授業を参観しに行っている<sup>(27)</sup>。

津田梅子は、明治女学校の設立時の教員として履歴書が提出されており、創立当初から英語を教えている。その後は華族女学校との兼務が困難となつて一旦辞職していると推察されているが、一八九四〜九五年頃は明治女学校の高等科で英語を教えており、次に示す一八九五年の卒業式の写真に写っている。また、津田梅子は『女学雑誌』にも頻

繁に寄稿している。

明治女学校は、火災と巖本の妻・若松賤子の死を受け、一九〇九年に閉校しているが、二四年にわたる画期的な教育は女性教育の発展に重要な役割を果たした。講師陣として、哲学は大西祝、心理学は元良勇次郎、英語は津田梅子と実力者が揃っていた。文学者の北村透谷、島崎藤村や、植村正久、島田三郎なども教壇に立っていた。また、同校の卒業生の社会貢献も大きく、卒業生の中に羽仁もと子や、後に津田と大隈の支援を受けた社会事業家の山室機恵子がいる。

以上のように、津田梅子の協力者となった巖本・桜井などは津田仙の知人であった。そのような関係から津田梅子は明治女学校でも教鞭をとって、自らの人脈を広げている。その中に、明治女学校の創立を援助し、同校の成長を見守った大隈の存在があった。さらに、そのパイプ役を担った島田三郎の役割も大きかった。島田三郎は早稲田大学の第六代総長島田孝一の父で、早稲田大学の議員も努めており、大隈を支持する政治家でもあった。島田の紹介で大隈は多くの女子教育機関や女性団体の援助をしている。

ところで、巖本や桜井はその後も大隈と親交を深め、大隈の支援を受けながら大隈の事業に貢献している。その関係は、二人が大隈に宛てた書簡によっても明らかである。

桜井が大隈に宛てた一八九九年七月五日付の書簡には、「扱々私義閣下の一方ならざる御厚配により多年渡米の志



明治女学校高等科の1895年の卒業記念写真。  
(津田梅子資料所蔵)

二列目の右から二人目が津田梅子、後列は巖本善治、前列の左から二人目が山室機恵子。

望を果たすことを得て感謝至極の事に有之候」と記しており、渡米できたことに対する大隈の協力に感謝している。<sup>(29)</sup> アメリカから帰国後は大隈の紹介で報知新聞社の記者となっている。

巖本の大隈に宛てた一八九八年六月二十八日の書簡では、「惟ふに女学界及基督教界の二方面に於ては、必ずや閣下の新政に対して全力貢献を致さんことを盟ふ」と書いて、大隈新政権において尽力したい内容を具体的に伝えている。<sup>(30)</sup>

桜井は、一九一〇年～一九一二年の大隈の巡遊の際も同行していること<sup>(31)</sup>からその後も大隈の厚い信頼を受けていたことが窺える。

## 七. 『開国五十年史』編纂と女子英学塾

次いで、『開国五十年史』編纂の経緯と巖本・桜井と女子英学塾の関係を明らかにする。

巖本と桜井は『開国五十年史』編纂の中核メンバーであったが、これは同書の出版経緯とも関係している。英文新誌社は、一九〇四年に日本の開国五十年を記念として日本の進歩を海外に紹介するため、日本の有識者にそれぞれの専門分野について原稿執筆を依頼し、その英訳をまとめて本を出版することを計画するが、その監修を大隈に依頼する。<sup>(32)</sup> しかし、当初の一九〇四年五月の刊行予定が大幅に遅れ、構想していく中で「大隈伯の事業」となっていく。<sup>(33)</sup>

一方、英文新誌社は女子英学塾と深い関係にあった。『英文新誌』の前身『英文新報』は一九〇一年一月に桜井を編集主任とし、新渡戸稲造を顧問に迎え、津田梅子をはじめ、女子英学塾の講師や津田の友人らが寄稿者となって始まった雑誌であった。同誌は、一九〇三年の春にその事務所を女子英学塾の校舎に移している。<sup>(34)</sup>

以上のように、『開国五十年史』は津田梅子が深くかかわっていた英文新誌社が計画していた事業であったが、予

定通り刊行が進まなかったことから、大隈が編集責任者となっていたのだろう。巖本・桜井は、英語版『開国五十年史』の刊行にも尽力している。<sup>(35)</sup>『英文新誌』は一九〇八年三月に廃刊になっているが、これは桜井が大隈の依頼により『開国五十年史』の英語版を出版するため、渡英したことが直接の原因であった。<sup>(36)</sup>

『開国五十年史』の編纂過程と関連していえば、同書は、一九〇六年五月に『早稲田文学』上に載せられた目次と刊行された時の目次が異なっている。<sup>(37)</sup>一九〇六年の構想では、下田歌子「上流社会の女子教育」、巖本善治「婦人の社会事業」、新渡戸まり子「家庭」、津田梅子「女子教育」、津田仙「農業及農業教育」など、女性に関する記事が多く、津田仙が執筆予定の農業についての項目もある。刊行された際は、これらの項目は削除され、「女子教育」は執筆者が津田梅子から成瀬仁蔵に変わっている。何らかの関係で大幅な修正が行われたことが窺えるが、当初の予定では女性に関する記事が多く、津田梅子も含め女性の執筆者が複数人いたことは、女性教育と深く関係していた巖本・桜井や女性教育に関心が高かった大隈の考案ではなからうかと考える。しかし、なぜ修正が行われたか不明である。津田梅子に関しては、一九〇六年一〇月から女子英学塾を病欠欠席しがちになり、翌年一月から一年間病氣療養のため渡米していることが関係している可能性もある。

ところで、『開国五十年史』上巻は、一九〇七年一二月に、下巻は一九〇八年二月に刊行されているが、下記のように大隈は同書上巻を津田梅子に送付している。津田は、大隈に宛てた一九〇八年三月七日付の書簡では、『開国五十年史』の寄贈を受けたことに対して次のように感謝の気持ちを伝えている。<sup>(38)</sup>

然者御撰著之開国五十年史上巻御刊行被遊候趣を以て御送本を辱ふし厚く御礼申上候。次に私事帰朝後早速に拝趨可致筈に候。如微恙之為延引申上居候段御海容被下度奉願候。執れ其内參邸御挨拶可仕事に御坐候。

以上のように、大隈は津田梅子に『開国五十年史』を寄贈していることがわかるが、そのような間柄であったことを証明するものであろう。

#### 八. その他の共通の知人

上述のように、多くの人のつながりによって、様々な教育事業や出版事業が行われており、かなりの成果があがったとみることができよう。次に、大隈と津田を結びつけるより広い人脈に焦点を当てる。

津田と大隈の共通の知人として、新島襄と新渡戸稲造をあげることができる。

周知のように、大隈は新島が同志社を創設した際に、募金活動を手助けし、物心両面において援助している。また、同志社出身の大西祝、浮田和民、安部磯雄らは早稲田大学の中核教授として大いに貢献している。一方、新島は津田家とも交流がある。津田仙は、新島と又新堂で出会い、以後親交を深めていく。津田梅子が、一八七二年にワシントンに着いたときは、新島は国外脱出の罪が取り消され、正式な留学生の身分であった。そこで初めて津田仙の次女である梅子に会い、その後も公使館を訪れ、梅子と会っている。女子英学塾創設の際に、特に財政面から支えた上野栄三郎は同志社の初期の入学者であり、新島襄から直接指導を受けている。

新渡戸稲造は、女子英学塾を創立当初から支え、後に理事を務め、自ら「塾の伯父」を名乗っていた。早稲田大学では大正期に科外講演を担当し、同校の科外講演の価値を高める存在になっている。<sup>(39)</sup> 既述のように、『英文新詩』の顧問も務めている。

また、津田梅子は複数の知人を通して政財界にアクセスできたことも、大隈と接する機会をもたらしていた可能性

がある。

まず伊藤博文であるが、伊藤は、津田を自宅に家庭教師として招いたり、華族女学校への就職を図ったり、津田を早い段階から支援した人であった。また、美子皇后も、女性教育に関心が高く、華族女学校の津田の授業を参観するなど、津田と頻繁に接していた。

津田梅子の留学生仲間山川捨松と永井繁子は、アメリカから帰国後、それぞれ捨松は大山巖と、繁子は瓜生外吉と結婚しており、津田は大山家と瓜生家と交際している。山川浩と山川健次郎は捨松の兄であり、津田は捨松を通して山川家とも交流があった。益田孝は繁子の兄で、益田の紹介で津田は鹿鳴館の晩餐会などに参加している。

これら明治の有力な人々と大隈は当然ながら交流があった。そのようなことから大隈と津田は多くの共通の知人を介して互いに接していた可能性があるともみることができよう。

### おわりに

以上、本論文では大隈重信と津田梅子の接点に焦点を当てて、様々な出来事を考察した。前半では、津田梅子の経験を通して政治家としての大隈の女性教育への貢献を明らかにするとともに、大隈の支援が津田にとってどのような意義があったか考察した。後半では、津田梅子の周辺の人々と大隈の関係について考察し、大隈と津田の接点の新たな一角を解明した。

大隈は参議時代から女性教育に理解があり、女性の海外留学を後押しした。アメリカの女性クラブ連合会の代表を歓迎し、同連合会の大会に津田梅子ら日本の女性教育者を派遣した。さらに、津田梅子らのイギリス訪問に理解を示

し、経済的にも援助した。一八九八年六月から翌年七月までの津田の米欧視察は、津田にとって私塾創設を決断する契機となった。津田が私塾を創設した後も、大隈は津田を応援し続け、女子英学塾を訪れたり、同校の生徒を励ましたりした。また、津田と書簡を交わしたり、自邸に招いたりして個人間の交流をも図った。

大隈重信と津田梅子の関係は決して密接なわけではないが、多かれ少なかれ協力関係にあったとみることができよう。大隈は周りの人々を常に支援する存在であり、津田梅子のことも陰に陽に支えていたのであった。また、大隈と津田を結びつける人々によって二人の関係はより親密になっていた。

本論文を通して大隈と津田の關係に焦点を当て、多くの人々のつながりによって成し遂げられた様々な事業を確認した。その中に女子高等教育を開拓した津田梅子と、津田を支えた人々の中に大隈の存在があった。また、津田の協力者になった巖本や桜井などは津田仙の知人でもあり、大隈の支援も受けていた。

このような関係は、社会学では社会関係資本と呼ばれ、それは社会的ネットワークを資本とする考え方である。大隈の支援を軸として周辺の人々が協力し合って物事を進めていく関係性は社会関係資本としての価値が高く、大きな効果をもたらしている。このようなネットワークは、人と人のつながりが薄れている現在の社会においても、人間関係構築の上で何らかの視点を提供するものであろう。

大隈重信と津田仙を中心とした社会的ネットワークにより、津田梅子は自らの学校を創設するための土台を築き、創設後も支えられた。また、大隈の支援により、教育者としての津田梅子の社会的地位が向上し、私塾創設という事業が、順調に進展した側面があると言えよう。



## 註

- Above sums of money will be sent to London to the care of 在英公使。  
Okuma  
Oct. 7 '98
- (1) 吉川利一『津田梅子伝』津田塾同窓会、一九五六年、山崎孝子『津田梅子』吉川弘文館、一九八八年、亀田帛子『津田梅子』双文社出版、二〇〇五年など。
- (2) 真辺将之『大隈重信』中央公論新社、二〇一七年、七二頁。
- (3) 『奎普龍將軍』山口惣吉、一九三七年、三八頁。
- (4) 『黒田清隆書簡 大隈重信宛 明治四年十月十四日』(早稲田大学図書館所蔵)。
- (5) General Federation of Women's Clubs
- (6) 石井筆子『過ぎし日の旅行日記——明治三十一年米國に使用し折りの顛末——』澤田廣憲発行、一九三九年、四頁。
- (7) 前掲書『津田梅子伝』二一五頁。
- (8) 「米國婦人俱樂部連合会大会開設二付津田梅子外一名参列之件(附英國ノ応招之件)」(外務省外交史料館所蔵)。
- (9) 外務大臣大隈重信による米中川臨時代理公使宛の電信。  
Nakagawa Washington
67. In reference to your telegram 88, no limit is placed to the term of leave of the two ladies, and they are to visit England solely on their own account. Consequently Impl. Govt. will not defray their expenses, but I will myself remit 2,000 yen towards their travelling expenses, and also probably Her M. the Empress will contribute 1,000 yen towards the same out of Her Majesty's private funds.
- Oct. 27 '98
- (10) 渡辺筆子のこと。
- (11) 大隈重信外務大臣による在英公使加藤高明宛の英文電信。  
Hayashi Petersburg  
在英公使 119. In reference to my telegram 110, two thousand yen contributed by me personally towards travelling expenses of 小鹿島 and 津田 will be sent by telegraph to you. You will hand the amount to the two ladies on their arrival in London.  
Okuma
- (12) 前掲書『津田梅子伝』二二二頁。
- (13) 同前書『津田梅子伝』二二二頁。
- (14) 女子英学塾同窓会『会報』第一号、一九〇五年六月、一〇頁。
- (15) *The Attic Letters*, edited by Yoshiko Furuki, Weatherhill, 1991, pp390~391°
- (16) 女子英学塾同窓会『会報』第七号、一九一一年六月、一〇頁。
- (17) 『婦女新聞』第五六八号、一九一一年四月七日、二頁。
- (18) マーガレット・フラング (Margaret Prang) / 島海白

合子訳『東京の白い天使 近代日本の社会改革に尽くした女性宣教師キャロライン・マクドナルド』教文館、一九九八年、六八頁。

(19) 『朝日新聞』一九〇五(明治三八)年一月二五日東京朝刊二頁七段記事「会」。

(20) 『明治の女子』第二巻第九号、七〇八頁。

(21) 『米国旗捧呈式 米国婦人倶楽部連合会より大隈伯爵夫人へ』『読売新聞』一九二二年一月三日朝刊。

(22) 来賓の名前は、正しくは「プラットナー夫人」であった。Women Present American Flag to Countess Okuma. *The San Francisco Call*, November 3, 1912. におよぶ Mrs. Blattner と表記されており、「プラットナー」が正しいと考えられる。

(23) 「津田梅子書簡 大隈重信・綾子宛 大正元年十二月二日」(早稲田大学図書館所蔵)。

(24) 女子英学塾同窓会『会報』第三号、一九〇七年七月、二頁。

(25) 並松信久「明治期における津田仙の啓蒙活動」『京都産業大学論集』第三〇号、九三頁。

(26) 同前論文「明治期における津田仙の啓蒙活動」九七頁。

(27) 神崎清『女学校ものがたり』山崎書店、一九三九年、一五三頁。

(28) 前掲書、亀田帛子『津田梅子』一〇〇〜一〇四頁。

(29) 「桜井彦一郎書簡 大隈重信宛 明治三十二年七月五日」

(早稲田大学図書館所蔵)。

(30) 「巖本善治書簡 大隈重信宛 明治三十一年六月二十八日」(早稲田大学図書館所蔵)。

(31) 『早稲田大学百年史』第二巻、早稲田大学出版部、一九八一年、二八九〜二九二頁。

(32) 「開國五十年(英文新誌の一大事業)」『The Student』第三八号、英文新誌社、一九〇四年一月一日、二七頁。

(33) 『The Student』第四二号、英文新誌社、一九〇四年三月一日、五六頁。

(34) 『津田英学塾四十年史』津田英学塾、一九四一年、六八頁。

(35) 泉正人「英版『開國五十年史』出版の経緯」『早稲田大学史記要』第二巻、一四一〜一七六に詳しい。

(36) 『津田塾六十年史』津田塾大学、一九六〇年、八五頁。

(37) 『早稲田文学』明治三十九年五月の巻、一八〜一九頁。

(38) 「津田梅子書簡 大隈重信宛 明治四十一年三月七日」(早稲田大学図書館所蔵)。

(39) 『早稲田大学百年史』第三巻、早稲田大学出版部、一九八七年、四九二頁。